

## ALP の IFCC 法試薬での基礎的検討

工藤 千穂<sup>1)</sup> 久方尚一<sup>2)</sup>

1) 県立宮崎病院 2) 県立延岡病院

「はじめに」2020年4月よりLDH、ALPについて日本臨床化学会の勧告するJSCC法から国際臨床化学連合の勧告するIFCC法への移行が始まっている。今回当院においてもそれに伴い検討する機会を得たのでALP試薬での検討結果を報告する。「方法」測定機器:Labospect006(日立自動分析装置) 検討試薬 ①クオリジェントALP-IFCC(積水メディカル)②LタイプワコーALP IFCC(富士フィルム和光純薬)③シカリキッドALP-IFCC(関東科学)④エクディアXL 栄研ALP-IFCC(栄研化学) 対照試薬エクディアXL 栄研ALP(栄研化学)「検討内容」同時再現性(n=20)、日差再現性、希釈直線性(十段階希釈)、相関(n=82)、アインザイムの影響、共存物質の影響。また、移行後の現状についても報告する。「結果」1)同時再現性 全ての試薬でC.V.値0.33~0.75%と良好な結果を示した。2)日差再現性 コントロール検体においてすべての試薬で変化率は±5%以内であり、良好な結果を示したが若干の試薬間差がみられた。患者検体(5検体 11日間)を用いた日差再現性もすべての試薬で変化率は10%未満であり比較的安定していた。3)希釈直線性 ①2700U/L ②1600U/L ③3100U/L ④1200U/L まで直

線性が確認できた。4)相関性 患者検体82例で対照試薬と比較を行ったところすべての試薬で $Y=0.35X$ 前後、相関係数1.0前後であり良好な結果を得られた。5)アインザイムの影響 妊婦検体16例を用いて比較したところ7例でIFCC法と比較し測定値が高値(IFCC換算値/測定値0.90以下)を示し、胎盤型ALPの影響が疑われた。また、患者検体82例のうち14例でIFCC法換算値と比較し低値(IFCC換算値/測定値1.10以上)を示し、小腸型ALPの影響が疑われた。6)共存物質の影響 遊離型ビリルビン、抱合型ビリルビン、アスコルビン酸、乳び、ヘモグロビンの影響は見られなかった。7)移行後4ヶ月の現状 一年間はJSCC法(換算値)とIFCC法を併記して記載することが委員会で決定した。「考察」カルテ上で一部基準値の変更が行われていなかったが現在は改善済みである。引っ越しの際にIPアドレスの変更がうまくいっていなかったことが原因であった。今回の基礎的検討において良好な結果を得られたことから全ての試薬が日常検査に有用であることが確認できた。直線性の限界や規格等はメーカーによって差が見られるため自施設に適した試薬を選ぶ必要があると考える。 連絡先 0985-24-4181